

にいかした

北から南から

と

翌早朝は快晴。

荷を軽くして、北股岳までのピストンであった途中門内岳のお花畑や広大な草原すばらしさに、まさしく自然の芸術と目をみはった。そして万年雪から絶え間なくわきあがるガスのなか、私は北股岳の頂上に立っていた。がむしゃらにならなくていい。他の人と競わなくてもいい。ゆっくりゆっくり歩き続け、つらくなったら休めばいい。山へこれない時はながめていればいい。かけぬける風が、そう私にいつて聞かせてくれた。

今も目をとじると、私の心は一足飛びに北股岳の頂上へ行き、あの風の声に耳をかたむけるのである。



支離滅裂

八木三男

いつものように羽越線の特急に乗った。ところどころに空席があった。七十がらみの瘦せぎすの男が、前の席を回転させて四人がけを独占し、足を投げ出して眠っていた。私はその後ろの席に坐った。身だしなみのいい営業マン風の中年の二人づれが、男を起こし、椅子をもとに戻して坐った。

男が急に怒り声でブツブツ独り言をはじめた。「せっかく眠っていたのに起こすやつがあるか」「立っているくらいのができないのか」「おれは〇〇市（山形県）の市会議員だ。どうしてこんな目にあうんだ」「新潟県はこんな奴がいるからもうだめだ」好き放

題を中年男に聞こえよがしにしゃべりまくっている。男のしゃべりかたは下品でしつこい。中年男は振り向きもせず煙草をふかしている。

「おれは田中角栄の孫だ。七十四歳だ。新潟県ではひどい扱いだ」田中角栄の娘より年長の孫とは恐れ入った。男が酔っ払っているのだと思ったら、飲んでいるのは果汁一〇〇%のりんごジュースだ。私は急に可笑しくなった。新潟駅に近づくと男はリュックサックを背負い、中年男を見向きもせずに出ていった。

妻が旅行から帰って憤然としていった。やはり特急の前の席で中年男が大きな声で携帯電話をかけた。妻がやめるようにいったら男はいったんは素直に謝った。しばらくしてまた電話をかけた。妻が二度目は「デッキで」といった。男が今度は開き直った。「ひとの話に聞き耳を立てるとはなんだ」。

こんな笑ってしまうほどの無茶苦茶な話にそうたびたび出会うものではないが、不愉快

ではある。

いま大多数の政党は文字どおり支離滅裂だが、やることは「首尾一貫」している。消費税、保健料の値上げなど失政のツケを全部国民にまわす。憲法さえ変える姿勢だ。これは笑ってはおられない。

(やぎみつおⅡにいがた県民教育研究所)

